

## 超短期交流プログラム参加は日本人学生のその後に何をもたらしたか —山形大学工学部国際連携サマープログラム参加者への追跡調査をもとに—

仁科 浩美

山形大学工学部国際交流センター

イプトナー カロリン

山形大学工学部国際交流センター

ジスク マシユ

東北大学大学院国際文化研究科

(令和4年10月3日受理)

### 要 旨

超短期交流プログラムは参加にどのような意義があるのかについて、2011年から2019年の工学部国際交流サマープログラム参加者への追跡調査をもとに検討した。その結果、10日程度のプログラムであってもその後の学生生活やキャリアに大きな影響を与えていることがわかった。学生生活においてはこれをきっかけに長期留学に進む者、キャリアにおいては就職活動時に海外と関連のある企業を自己の選択肢に加えたり、交流プログラムで訪れた先に海外赴任する者もいた。回答者があげた意見・コメントから、超短期プログラムの意義は6つに大別されたが、最も肝心なものは「視野拡大」である。そこから「姿勢や態度の見直し・不安や恐怖からの脱却」「他者からの学びによる自己成長」が起り、「次のプログラム参加・進学・留学」「コミュニケーション力・英語力の向上」へつながって、さらに「就職・仕事への選択肢の幅拡大」へと良い流れを生む可能性があることが明らかとなった。時間的には短いプログラムであるが、その役割は非常に重要であることが示された。

### 1. はじめに

2010年前後、世界の若者に比べて日本人学生の海外留学者数が少ないことが話題になって以来、官民協働による「トビタテ! 留学JAPAN」や多くの教育機関等により日本の若者をグローバルな視野を持った人材に育てるべく、様々なプログラムが企画・実施されてきた。その結果、日本学生支援機構(以下、JASSO)(2022)の調査によれば、2009年度日本人学生の留学者数は36,302名であったが、2018年度には115,146名となり、約10年間で3倍強の伸びを見せた<sup>1)</sup>。コロナ禍により、2020年度は、その数が1,487名と激減したが、留学に関心を示す者は多くおり、コロナの収束とともに留学者数はまた増加に転じるだろうと推測される。

留学プログラムには、1か月未満の短いものから1年以上の長期のものまで、いくつか

の種類があるが、JASSO（2021）の調査結果における期間の区分けで最も多くの割合を占めるのは1か月未満のものである<sup>2)</sup>。本稿では、このような1か月未満のプログラムを「超短期プログラム」と呼ぶ。同調査によると、COVID-19の影響がなかった2019年においては、日本人留学生全体のうち、超短期プログラム参加者の割合は66.4%を占めており、超短期プログラムを充実させる意義は大きい。

プログラム実施機関においては、実施後にプログラムの有効性を確認するための調査が行われている。2011年・2012年にJASSOの留学生交流支援制度の「ショートビジット」と「短期派遣」に採択され奨学金を受けた学生へのアンケート調査では、「ショートビジット」は期間が3か月未満とされているが、このようなプログラムにおける特徴的な傾向としては、語学への勉強のモチベーションの向上や異文化理解の点で自己評価が高かったことが報告されている<sup>3)</sup>。

立命館大学で実施した1週間程度の超短期留学プログラムに関する参加者への調査では、超短期プログラムにおいて、自己管理、対人関係、計画実行のような経験に関する観点は自己認識しやすく、また直ちに变化しやすく、この点で一定の成果が得られたという。しかし、その一方で、リーダーシップやコラボレーションといった姿勢・態度にかかわるものは、自覚していても短いプログラム中に直ちに变化することは難しいことが述べられており、企画・実施する大学側が何を目的にプログラムを提供すべきか、教育的効果を考える上で参考になる<sup>4)</sup>。

このほかにも、超短期プログラムの事前事後の参加者の意識・変容に関する調査報告や変化の可視化に関する報告があるが<sup>5)~8)</sup>、これらはいずれも学生の研修終了後の在学中に調査したものであり、プログラム修了から数年経た後にその意義を検証するといった、より長期的な視点から捉えた調査は管見の限り見当たらない。

そこで、本研究では、過去9年間の本学部プログラム参加者に対し実施した追跡調査をもとに、超短期の国際交流プログラムへの参加がその後の進路・キャリアや人生にどのような影響を及ぼす可能性があるのかを明らかにし、超短期プログラムの意義を検討する。

## 2. 山形大学工学部の超短期プログラム「工学部国際連携サマープログラム」の概要

山形大学では6学部全学生を対象にした協定校への短期交換留学や海外サテライトオフィスのある協定校での学生交流プログラム「学生大使」等が実施されているが、そのほかに、各学部の専門性を生かしたプログラムも独自に展開している。工学部においては、米沢キャンパスに在籍する学部2年生から大学院までの学生を対象に工学部国際連携サマープログラム（以下、サマプロ）や海外研修実習<sup>\*1</sup>を行っている。

サマプロは2008年に受入プログラムとして開始された<sup>\*2</sup>。その後、2011年からは受入プログラムと派遣プログラムを隔年で実施しており、派遣プログラムは海外協定校を会場に相手校と連携協力しながらプログラムを開発、実施している。表1に各年の受入／派遣の別、会場、実施期間、本学日本人学生の参加者数を示す。受入・派遣、どちらのプログラムにおいても、趣旨は協定校との連携強化、そして、国際的な経験に乏しい参加学生が異なる言語・文化・教育環境に触れることで国際的な感覚を養い視野を広げることにある。参加者は、工学部生および理工学研究科および有機デバイス工学研究科の博士前期課程の

表1 これまで実施してきた工学部国際連携サマープログラム

	実施年度	受入／派遣	会場	対面交流期間 (日)	本学部 日本人学生 参加者数(名)
1	2008	受入	山形大学工学部	11	8
2	2009	受入	山形大学工学部	10	10
3	2010	受入	山形大学工学部	11	10
4	2011	派遣	マレーシア、マラ工科大学	8	15
5	2012	受入	山形大学工学部	11	13
6	2013	派遣	タイ、ラジャマンガラ工科大学タニャブリ校	11	15
7	2014	受入	山形大学工学部	10	13
8	2015	派遣	台湾、中央大学・台湾大学	11	15
9	2016	受入	山形大学工学部	10	15
10	2017	派遣	中国、東北電力大学・吉林大学	10	10
11	2018	受入	山形大学工学部	10	13
12	2019	派遣	タイ、キングモンクット工科大学ラカバン校	10	11
13	2020		COVID-19のため延期	—	—
14	2021	代替	(タイ、カセサート大学理学部とのオンライン交流)	5月～12月 (オンライン 7日)	9
			計		延べ157

学生である。よって、皆、工学系を専門とするものの、毎回、学年や学科・研究科が異なる多様な学生が参加している。海外の学生と本学の学生が対面で直接行動を共にするのは約10日であるが、活動全体は事前の準備活動から事後の最終報告発表会まで夏季休暇を挟み約4か月にわたって行われている。

受入プログラムは、アジアの複数の海外協定校から学生を募り、期間中は本学部の学生と共にしながら毎回のテーマに沿って活動を遂行している。海外からの留学生に対しては、日本の最先端研究への理解促進や将来的な本学への進学も期待している。2014年のプログラムからはJSTのさくらサイエンスプログラムの支援を受け、実施している。一例を挙げると、2018年のプログラムでは、インド・マレーシア・タイの6大学から15名の学生を招聘し、「次世代ロボットと共存する未来社会」をテーマに、本学の教員による講義や研究紹介、合宿を含むグループワーク活動・発表会などを行った。

派遣プログラムは、本学からの十数名の学生が引率教員と共に海外協定校を訪れ、現地の学生と一緒に大学内の研究施設の見学、講義参加、卒業生などが勤務する日系企業訪問、フィールドトリップなどを行うもので、これまでアジアの協定校を中心に派遣してきた。

サマプロは、交流期間が超短期で、教員がサポートしながら遂行するグループ研修であるという点で、本学の国際交流プログラムの中では入門編として位置づけている。2020年以降は、COVID-19のため、受入／派遣とも実現できておらず、代替プログラムとしてオンライン交流を実施している。

### 3. プログラム参加者への追跡調査

調査対象者は、連絡が取れるか否かを判断の基準とし、SNS上でのグループが現在でも利用可能な2011年から2019年のプログラム参加者延べ120名（異なり数113名）とした。しかし、既にSNSのグループを退会している者もあり、また、SNSでのグループに名前があったとしても必ずしも閲覧するとは限らないので全員に確実に届いているとは言い難いが、計算上は103名（異なり数）の参加者に調査協力の依頼を行った。なお、2021年に実施した代替オンラインプログラムはこれまでの実施状況と内容・環境の面で大きく異なるため、調査の対象外とした。

アンケートによる追跡調査の実施概要は以下のとおりである。

対象者：2011年～2019年の間にサマプロに参加した113名のうち、SNSからの連絡が可能な日本人参加者103名

回答者数：50名（回収率 48.5%）

調査時期：2022年9月9日～9月25日

調査方法：Google formsによるオンラインアンケート調査

調査内容：(1) 現在の状況：職業・業界・職種・海外との関わり・英語力

(2) サマプロ参加に関して：当時の学年・その後の海外プログラム参加の有無・一番の思い出・当時の仲間との関わり・今、振り返って考えるサマプロに参加した意義等

(3) 後輩へのアドバイス

(4) 企画する大学側への意見・コメント等

なお、質問項目の詳細は付録に示す。

### 4. 調査結果

#### (1) 回答者内訳と当時の状況

表2に年度別の回答者数を示す。回答者50名のうち、9名は受入・派遣の両方プログラムに2続で参加しているため、合計が59となっている。受入／派遣の種別で言えば、受入プログラムのみの回答者は10名、派遣プログラムのみの回答者は31名、両方に参加した回答者は9名であり、回答は派遣プログラム参加者の考えが強く出ている傾向がある。

表3に示すように、回答者の参加当時の学年は、学部2年が最も多く4割を占める。実際の2011年～2019年の全参加者における学部2年生の割合は47.5%と今回の調査よりやや多いものの、学部2年生の参加が最も多いという点で今回の調査結果は参加傾向の実態をほぼ反映している。

サマプロ参加以前に、個人旅行も含め、海外渡航の経験の有無については、「なし」が21名（42.0%）、「あり」が29名（58.0%）であった（図1）。当時のサマプロ申請書を確認すると、「経験あり」の場合、その内容は個人・家族での旅行や、高校での修学旅行などであった。

サマプロ参加後、大学や公の機関等が提供する別の海外プログラム<sup>\*3</sup>に参加したかの質問については、「サマプロのみ」が50名中23名（46.0%）と最も多かった（図2）が、

表2 年度別回答者数

年度・受入／派遣	人数
2011・派遣	8
2012・受入	5(2)
2013・派遣	12(3)
2014・受入	3
2015・派遣	11(1)
2016・受入	5
2017・派遣	4
2018・受入	6(2)
2019・派遣	5(1)
計	59(9)

( ) : 2回目の参加者数。内数

表3 参加時の学年

学 年	人 数	%
学部2年	23	39.0
学部3年	16(5)	27.1
学部4年	11(3)	18.6
博士前期1年	5	8.5
博士前期2年	4(1)	6.8
	59(9)	100.0

( ) : 2回目の参加者数。内数

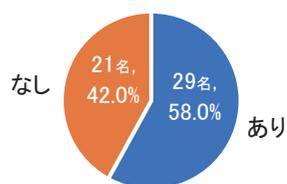


図1 サマプロ以前の渡航経験

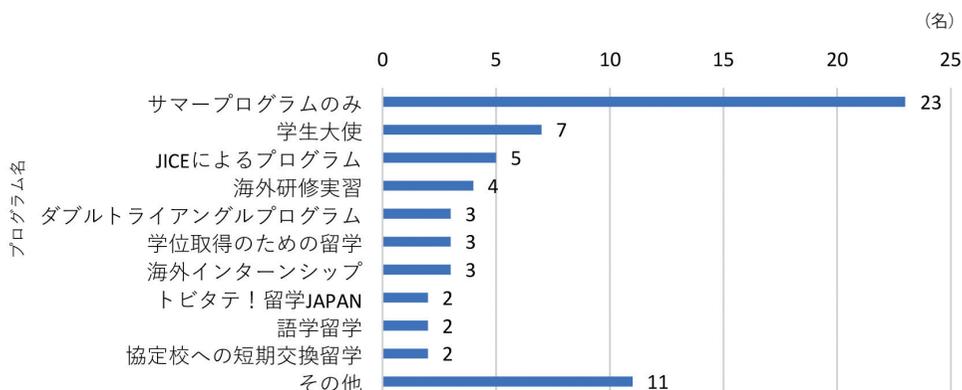


図2 サマプロ後に参加した別プログラム（複数回答可）

表4 「サマプロのみ」の回答者が参加した学年

参加学年	人数	内訳：プログラム年度（人数）
学部2年	8	2014(1), 2015(1), 2017(1), 2018(1), 2019(4, 現在も全員学生)
学部3年	5	2013(1), 2014(1), 2015(1), 2018(2, うち現在も学生1)
学部4年	4	2011(3), 2013(1)
大学院	6	2011(3), 2013(1), 2017(2)
計	23	

残りの27名は、本学が主催する「学生大使」や工学部が主催する「海外研修実習」など何らかの別プログラムにも参加していた。この27名のうち、8名はサマプロ以外に2つ以上のプログラムに参加しており、中には4つのプログラム（「学生大使」「海外研修実習」「海外インターンシップ」「ダブルトライアングルプログラム」）に参加した人や、3つのプログラム（「学生大使」「語学留学」「学位取得のための海外留学」）に参加した人（2名）も

確認された。この回答者らがサマプロに参加した時の学年は学部2年生であり、本人の海外への興味関心・行動力はもちろんであるが、若い学年であることがそれだけ他のプログラムを経験する時間を調整しやすかったものと推測される。サマプロ後に参加したプログラムは、短期のものが多く傾向にあるが、海外インターンシップや学位取得のための留学など、より長期のプログラムに挑む積極的な学生の姿も見られる。しかし、その一方で、サマプロのみの参加となった（なっている）学生も23名と半数近くいる。これらの学生が参加した学年の内訳を表4に示す。学年が高くなると専門的な研究活動が増すとともに進路についても準備に時間を要するため、その後、別のプログラムに参加するのは難しくなるのはやむを得ないが、この中には2018年、2019年に学部2年生、3年生で参加し、現在は院生になっていると思われる5名が含まれていた。この学生についてはCOVID-19の影響を多分に受けており、海外との接触にも制限がある中でこの数年を過ごしている可能性が考えられる。

## (2) 回答者の現在の状況

現在の職業は、「会社員」が最も多く33名(66.0%)、次いで「学生(院生)」が9名(18.0%)、「教諭・教員以外の公務員」が4名(8.0%)と続く(表5)。「会社員」と答えた回答者に業界を尋ねたところ、12種に分類した業種<sup>\*4</sup>のうち、「メーカー(電気・自動車・機械)」と「メーカー(素材・食品・生活用品・医薬品・化学・繊維・金属製品等)」の2つで3/4を超える結果となった(表6)。

表5 回答者の現在の職業

職業	人数	%
会社員	33	66.0
学生	9	18.0
公務員(教諭・教員を除く)	4	8.0
自営業	2	4.0
大学教員	1	2.0
その他	1	2.0
計	50	100.0

表6 会社員の回答者が勤務する業界

業界	人数	%
メーカー(電気・自動車・機械)	14	42.4
メーカー(素材・食品・生活用品・医薬品・化学・繊維・金属製品等)	11	33.3
情報・通信・関連ソフト	3	9.1
建設・不動産	1	3.0
コンサルティング・シンクタンク・リサーチ	1	3.0
商社・卸売業	1	3.0
金融	1	3.0
その他	1	3.0
計	33	100.0

表7 会社員の回答者の職種

回答者数33(複数回答可)	
職種	人数
技術・研究系(研究開発、生産・製造技術、品質・生産管理、施工管理、機械・電子機器設計)	23
IT系(SE、プログラマー、カスタマーエンジニア、セールスエンジニア等)	4
企画系(宣伝広報、マーケティング、企画・商品開発等)	3
事務・管理系(総務・会計、物流・在庫管理、貿易事務、一般事務等)	2
営業系(営業 営業推進・販売促進等)	2
専門系(MR、介護士、インストラクター、経営・ITコンサルタント、翻訳通訳等)	1
金融系(ディーラー・トレーダー、証券アナリスト、資産運用マネージャー等)	1
販売・サービス系(販売スタッフ、店長、バイヤー等)	1
その他	1
計	38

さらに33名の会社員の職種（複数回答）で最も多いのは、技術・研究系（23名）であり、工学系の専門性を活かした研究開発、生産・製造技術、品質・生産管理・施工管理、機械・電子機器設計といった仕事に従事していることがわかった（表7）。

50名の回答者全員に「仕事(学生は学業)で、海外と関わりを持つような業務に携わることがあるか」を尋ねたところ、32名（64.0%）が「あり」と回答し、日本の産業がいかにグ

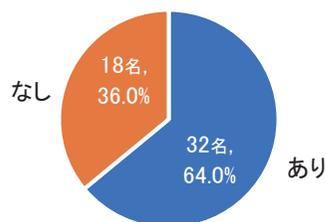


図3 業務は海外と関わりがあるか

表8 業種別海外と関わりのある業務

職業	業 種	海外と関わりのある業務内容 ( ) : 同意見数	人数
会社員	技術・研究系（研究開発、生産・製造技術、品質・生産管理・施工管理、機械・電子機器設計等）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・エンジニアとして海外出張、海外赴任(4)</li> <li>・外国人社員と仕事をする機会がある(2)</li> <li>・海外向けのエンジニアリング業務(2)</li> <li>・製品の市場調査</li> <li>・海外顧客に対し、技術や商品を紹介</li> <li>・国内社内の外国人社員との関わり</li> <li>・日本で研修する外国人社員への指導</li> <li>・海外部品メーカーとの打合せ</li> <li>・現地工場での製品開発業務</li> <li>・技術プレゼンテーション、学会、セミナー聴講など</li> </ul>	11
	企画系（宣伝広報、マーケティング、企画・商品開発等）、販売・サービス系（販売スタッフ、店長、バイヤー等）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界中の部品バイヤーとの情報交換、グローバル最適発注の検討等</li> <li>・海外顧客との取引、現地法人社員との情報交換</li> </ul>	2
	営業系（営業、営業推進・販売促進等）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外赴任</li> <li>・関連素材企業で営業職に従事</li> </ul>	2
	事務・管理系（総務・会計 物流・在庫管理・貿易事務 一般事務等）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外グループ会社の担当者との業務</li> <li>・海外支店からの問い合わせ対応（基本的にはメール）</li> </ul>	2
	IT系（SE、プログラマー、カスタマーエンジニア、セールスエンジニア等）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外拠点への説明会等</li> <li>・通常業務で、情報共有やコラボレーション等</li> </ul>	2
	専門系（MR、介護士、インストラクター、経営・ITコンサルタント、翻訳通訳等）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外資系の企業のため、本社とのやり取りなど</li> </ul>	1
	金融系（ディーラー・トレーダー、証券アナリスト、資産運用マネージャー等）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外での調査等</li> </ul>	1
	その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外事業会社の主管業務</li> </ul>	1
公務員		<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究論文執筆</li> <li>・海外イベント企画実施</li> <li>・海外の研究者とやり取り</li> <li>・海外メーカーとのやり取り</li> </ul>	4
教員		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学会、留学生対応</li> </ul>	1
学生		<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際共同研究</li> <li>・国際学会参加</li> <li>・海外での研究生活</li> <li>・ゼミで留学生の発表に対する質疑応答、英語論文を読む</li> <li>・海外にいる教員との定期的なオンラインミーティング</li> </ul>	5

ローバルに動いているかを示す結果となった（図3）。

「あり」と答えた回答についてその具体的な内容を尋ねた。結果を職種ごとに集計したものが表8である。32名のうち22名（68.8%）は会社員である。技術・研究系はエンジニアとしての職務から、海外出張はもとより海外に赴任し、現地での製品開発業務や、関連メーカーや顧客との関係構築にあたっているケースが多く見られた。また、営業系も同様に海外に赴任し、現地で業務を担当している者もいる。さらに、技術・研究職は国内においても外国人社員への指導などグローバルな環境下でのコミュニケーション力が必要とされていることがわかった。企画系、事務・管理系などでは、「海外赴任」は見られなかったが、頻繁な情報のやり取りが必要となると思われ、オンライン上で、読む・書く・話す・聞くの4技能を駆使しながら業務にあたる様子が推察される。公務員も職種や部署によって異なるが、回答には企画や打ち合わせ等のやり取りや自身の論文執筆に海外と関わるとの回答が得られた。

海外と関わりのある業務を行う場合、多くは英語が用いられると推測されるが、サマプロ参加時と比較した英語力の変化については、図3の32名中28名が「かなり上がった」または「上がった」と回答した（表9）。その理由としては、海外赴任や海外研修など実践での業務を通して培ったものが多いが、「度胸」「挫折からの努力」「通じる英語」「英語の必要性の認識」といった言葉に見られるように、マインドセットの切り替えに関わる部分も重要な点と思われる。コメントの中には、サマプロ参加により、英語ができない自分への気づき、世界への視野拡大、参加者からの刺激・影響を得たことがその後結び付いたという声もあった。

一方で、普段の業務で海外との関わりがほとんどない18名については、機会が減るとともに英語力も低下することは想像に難くなかったが、そのような環境下でも半数近くの間答者は海外プログラムを通じて海外の友人、あるいは語学に関心のある日本の友人ができたことで英語力を維持、あるいはさらに高めていると答え、英語や語学の興味関心を今も

表9 海外との関わり別英語力の変化

	かなり上がった	上がった	変わらない	下がった	かなり下がった
関わりあり(32名)	8名	20	2	2	0
理由一例	・業務を通じて ・ネイティブな英語だけが通じる英語じゃないと分かったから。 ・挫折経験からの努力、自学	・サマプロ参加を機に英語力の必要性を感じ学習の意識が生まれた。 ・話す度胸が鍛えられた。	・上がった部分と下がった部分がある。 ・英語に対する日常の努力不足	・英語に触れる機会が減った。 ・英語でアウトプットする機会が減ったため。	
関わりなし(18名)	1名	7	2	6	2
理由一例	・海外で友達が増えて、もっと英語を話せるようになり、友達と交流を深めたいと思ったから。	・語学への興味、語学が堪能な友人が増えた。 ・サマプロ中、話せなかったことが悔しかったので、今でも英語学習を継続中。	・サマプロ後に意欲が向上して上がったが、コロナになってから機会が減り、ブラマイゼロ。	・英語に触れる機会が少なくなったため。 ・日常生活、仕事ともに英語を使用する機会がないため。	・社会人になってから日本語以外を使う機会が減ったにないから。

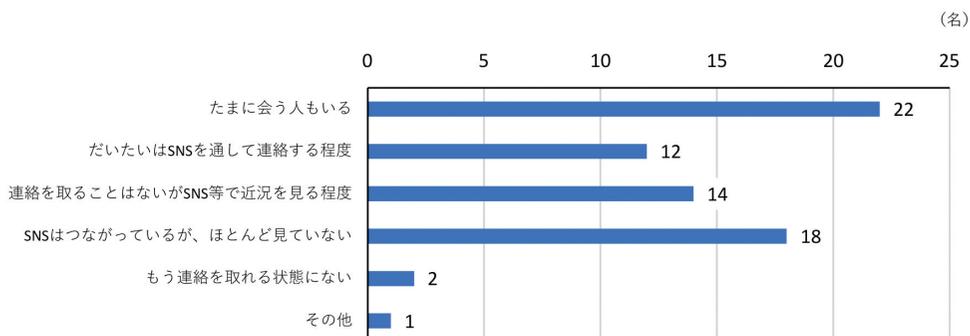


図4 山形大学の参加メンバーとの交友状況

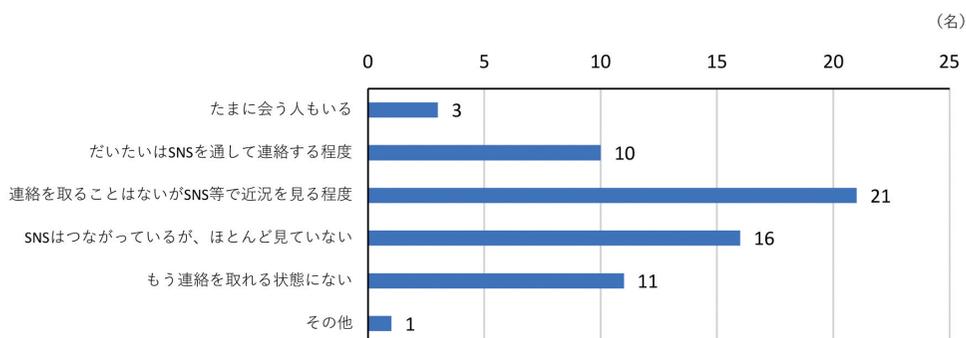


図5 海外の参加メンバーや現地の人との交友状況

持続させていることがわかった。

図4・図5に現在の交友状況についての結果を示す。本学の参加者間においては、「たまに会う人もいる」と「SNSはつながっているがほとんど見ていない」が多いが、その親疎の関係は当時のメンバーの友好度や時間の経過によるところが大きいと考えられる。「たまに会う」の回答には、2013年度、2015年度の参加者が多い。実際にこの回の参加者らは今も自主的に集まり親睦を深めており、良好な関係性がうかがえる。

海外で知り合った人との交友においては「会う」のは国内の友人より容易なことではないが、3名は「たまに会う人もいる」と回答した。最も多いのは、「だいたい、連絡を取ることはないが、SNS等で近況を見る」であった。積極的ではないが、緩く傍観者のようにつながっている状態と言えよう。「もう連絡を取れる状態にない」の回答者には参加年度が古い参加者が多く、時間とともに関係が疎遠になっていると思われる。

サマプロ参加から3年～11年が経過し、人に

表10 最も印象深く心に残っていること

項目	人数
海外の学生との交流	21
文化・生活環境の違い	7
グループワーク・合宿（受入のみ体験）	6
ホームステイ（派遣のみ体験）	6
海外の大学環境（派遣のみ体験）	3
ハブニング	2
見学活動・企業訪問	2
自己成長・自己発見	2
特になし	1
計	50

よっては一昔前の出来事になっているが、「最も印象深く心に残っていること」については表10に示す結果となった。受入／派遣それぞれで独自に実施した活動もあるため、回答にはその特徴が表われているが、圧倒的に心に残っているのは、海外学生との交流である。「たくさんの学生といろいろな場所に行けて、英語がうまくなくてもたくさん会話をして仲良くなれたこと」「セバタクローやサッカーといったレクで交流をはかったこと。現地で良い友人ができるきっかけになった。」「現地の学生に観光では知ることができないような文化を教えてもらったこと」等、学生同士が自由に過ごす時間を有効に使い、交流を深めた様子が想像される。企画する側も活発な交流が生まれるよう、グループワークや合宿などの活動を意図的に設定しており、ある程度うまく機能していることが表より確認できるが、学生らの自らの意思で動いた時間は非常に密で、充実していたものと思われる。

### (3) サマープログラムへの参加の意味

サマプロの後、参加者は別の留学プログラムに挑んだ人、学部を卒業し社会人になった人、大学院に進学した人等、それぞれの道を歩んでいるが、「サマープログラムに参加したことは、その後の学生生活、さらには、あなたのキャリアにどのような意味があったか」の質問への回答<sup>\*5</sup>は表11のように分類された。

最も多い回答群については、その内容から「視野の拡大」と名付けた。これまで海外にあまり興味を示すことがなかった自分がサマプロに参加することにより、世界が広がりそこから選択肢が増えたこと、世界が以前より身近なものとなったことを挙げていた。一例を挙げると、ある回答者は、サマプロ以前は全く海外志向がなかったが、参加することにより異文化交流の重要性を認識し、海外でも活躍できる人間になれるよう自己研鑽に励んだことを述べていた。普段の地方都市での学生生活は大学とアパートの往復で終わっていることが多く、また地域においても外国人在住者や旅行者を都市部ほど見かけるわけでもない。インターネットで世界の情報を瞬時に知ることができる時代であっても、異文化の空気を実際に体験することがいかに効果的であるかを示している。

2番目に多かったのは、「恐怖心」「抵抗」「躊躇」といった単語と、「挫折」「自分を見つめ直す」といった単語が使われたコメントからなる回答群である。サマプロ参加が自己の消極的態度や気持ちの持ち方に前向きな変化、あるいは、挫折や衝撃から起き上がり再度歩み直すといった変化を生じさせた。

3番目の「就職・仕事への繋がり」、5番目「次のプログラムへの展開」は視野が広がったことが大いに影響していると思われる。多様な道があること、それを自分も選択していただけるのだという認識が次の行動を生み出している。

4番目の「他者からの学びによる自己成長」は、協定校とのグループ研修ならではの特長とも言えるが、良い意味でユニークな仲間と出会い、密な時間を過ごすことで自分にはない様々なものを学ぶことが多かったと思われる。

6番目の「コミュニケーション力・英語力の向上」は、実践的な話すスキルが不十分であることを体験から実感したこと、またその一方で、文法の正確さよりもむしろ伝えようとする強い気持ちや姿勢が重要だという新たな気づきが得られたことが述べられている。どちらにおいてもその後の外国語でのコミュニケーションに対する意識や態度に大きな影響を与えたことが推察できる。

表11 振り返って考えるサマプロ参加の意味

(複数回答可)

	人数	例
視野拡大	19	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の視野を広げるきっかけとなった。</li> <li>・交友関係、仕事、趣味など世界が広がりました。サマプロに参加していなかったら興味を持つことも、挑戦することもなかったかもしれない…と思うことがいろいろある。</li> <li>・サマプロ以前は全く海外志向がなかったが、以後異文化交流でできることの重要性を肌で感じ、海外でも活躍できる人間になれるよう自己研鑽を継続出来たこと。</li> </ul>
姿勢や態度の見直し、不安や恐怖からの脱却	12	<ul style="list-style-type: none"> <li>・元々自分に自信があった方だったが、サマプロに参加したことで英語力だけでなく、人間としての未熟さを感じ自分自身を見つめ直す良い機会になった。</li> <li>・異文化交流に対する恐れが軽減した。</li> <li>・初の海外経験かつ英語も上手く話せないため、とても恐怖心があった。だがサマプロの先生、仲間、現地学生との交流を通じてそれらは払拭された。払拭どころかもっと世界を知りたいという気持ちが生まれ、今ではグローバル企業で働いている。</li> </ul>
就職・仕事への繋がり	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・留学生との関わりが増え、海外にも興味を持つようになった。日本だけでなく、海外に関わりがある業務に興味を持つようになり、海外に取引先や代理店があるメーカーに就職した。</li> <li>・仕事で過去の台湾経験から台湾顧客担当となった。</li> <li>・今の会社は海外と接点が多いが、サマプロに参加していなければ、入社していない可能性が多い。</li> </ul>
他者からの学びによる自己成長	6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・振り返ると、サマプロで関わった人達から影響を受け、型に捉われず自ら考えて行動しチャンスを掴んでいく姿勢がいつの間にか構築されていたと思う。</li> <li>・プログラムに参加した学生、その先でつながった人々はアクティブな人が多く、普段受動的な私は彼らから得る様々なチャンスがあった。就活も沢山助けてもらって、会ってなかったら人生が違ったと思う。また、日本人外国人関係なく個性的な人が多く、自分の考えを改めることも多くあった。自分の幅を広げてくれたと思う。</li> </ul>
次のプログラムへの展開	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人で渡航する学生大使や海外研修にチャレンジでき、英語力と行動力を伸ばすことができた。</li> <li>・他の海外研修や語学留学への挑戦という選択肢が増えた。</li> </ul>
コミュニケーション力・英語力の向上	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サマプロでは英語がうまく話せなくて悔しい思いをしたので、英語の勉強を始めるきっかけになった。</li> <li>・文法が完璧ではなくとも言葉を伝えようとすれば意外と何とかなるという経験を得た。</li> </ul>
その他	1	特になし

#### (4) 後輩へのアドバイス

後輩へのアドバイスについては、サマプロへの参加を後押しする肯定的なコメントが並んだ。数例紹介する。自身の体験をもとに、昨今の社会情勢も踏まえて海外を体験することの必要性を説明し、プログラムへの参加を促すものが多い。

- ・海外の人の勉強に取り組む姿勢はとてつもなく、大変刺激を受けます。私の職場の台湾人の営業、品質保証、管理系職種の方は半数以上が日本語を話し、英語を話せることは当たり前です。ですが言葉はあくまでツールですから、熱意を持って伝えようとする姿勢が更に重要です。私も海外赴任をして、刺激を受けながら日々勉強しています。
- ・参加に少しでも迷ったら応募してみることをオススメします。「環境」と「出会う人」で大きく変わる自分の考え方や価値観に気づき、それをこれからの自分の人生に生かすことができるはずです！
- ・海外の雰囲気や海外から見た日本、また海外に行ったことでわかる日本の良さを感じてみませんか？英語や現地語が上手く話せなくて不安な学生もいると思います。私自身も上手く話せなかったため、初めて参加するときは非常に不安でした。ですが、相手を尊重して真摯に対応すれば相手も尽くしてくれると実感しました。
- ・私は受け入れのみに参加でしたが、学内で得られる国際交流の機会として、非常に気軽に参加できるにも関わらず、英語プレゼンの経験や得られる人間関係は非常に濃いです。
- ・少しでも海外に興味があるのであれば参加することをお勧めします。きちんとしたプログラム内容をこんな低コストで参加できる機会はなかなか無いと思います。ぜひチャレンジしてみてください。
- ・日本のグローバル化は避けられません。海外でも働けるという選択肢を持つためにも、サマプロへの参加をお勧めします。

#### (5) 企画する大学側への意見・コメント

参加者ゆえに感じた意見・コメント、あるいは、社会人としての視点から感じた意見・コメントが数多く寄せられた(表12)。中でも、サマプロが対象とする学生像やプログラムレベルの明確化、より主体的な活動の導入の提案などは、示唆に富むものであり、今後の課題として見直しが必要であろう。小規模の改善はその都度行ってきたものの、COVID-19により一気に普及したオンライン活動や、コミュニケーションツールやシステムの多様化・進歩といった社会の新しい動向を受け、より大胆な改革が必要な時期に来ているのかもしれない。

表12 サマプロに対する大学側への意見・コメント

トピック	人数	意見・コメント
コロナ禍でも継続を	9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍でも、リモートでできるようなイベント等を通じて、留学体験ができるようにしてあげてほしい。</li> <li>・今後も継続を</li> </ul>
プログラム中の自由時間	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ある程度自由に学生同士の交流をさせてもらったことがプログラム終了後の交流維持につながった。自由な時間の中でかなり英語力、コミュニケーション能力が鍛えられて成長できたので、これを確保してほしい。</li> <li>・なるべく課題を与えず学生同士の交流に重点を置いて自由にさせてあげてほしい。</li> </ul>
プログラム参加レベルの明確化	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サマープログラムと聞くとピンと来なかったり、難しそうだなという印象を持つかもしれない。英語が得意な人しか参加しないというより、苦手意識がある学生でも苦手意識を克服できるようなプログラムという宣伝をして、参加するハードルを下げた方がいい。特に工学部の学生は英語が苦手な人も多いと思うので、こういう機会を多くの人が参加できた方がいい。</li> <li>・本人や周りに海外経験があり元々海外が身近な人と、全く初めての人では考えや感じ方が違うと思う。前者がリーダー的存在となり、後者は引け目を感じる人が多いと思う。</li> <li>・受入より派遣のサマプロに魅力を感じる学生が多いと思うが、翌年への布石としての受入プログラム参加という方法も一案だと思う。</li> </ul>
周知方法	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サマープログラム自体を知らない学生が多かった印象がある。</li> </ul>
派遣地	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・隣国より、こういう時でないといけない国が良い。タイは英語のレベルも高く良かった。</li> <li>・アジアの大学との交流が多いようなので、アジア以外の欧州、アフリカ、北米、南米と様々な地域で国際プログラムができるようにしてほしい。</li> </ul>
主体的にかかわる活動の導入	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会人になり、企業の人や他大学卒の人と関わる中で海外研修の内容も主体的に取り組んできたものがとても評価されていると感じる。サマプロも文化交流や研究紹介、会社訪問等の受け身的要素だけではなく、主体的なものを更に加えると学生の将来にプラスに繋がるのではと思う。(例:参加学生が事前に現地企業と関わり課題に取り組む等)</li> <li>・海外に行けることを前提に適度な課題を与えてほしい。</li> </ul>
協力の申し出	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外の方と仕事で多く関わっているので、必要とあれば在校生の方とも会話可。</li> <li>・海外赴任がいつになるか不明ですが、機会があれば協力可。</li> </ul>
多様なレベルのプログラム提供	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サマプロで自信をつけ、学生大使や海外研修に参加することができた。今後もさまざまなレベルのプログラムがあると良いと思う。</li> </ul>
全学生へのプログラム提供、参加の義務化	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生に経験の機会を与えることは、未来の社会への投資になると思う。学生時代は行うことが多くあるし、また中々積極的に乗りきれない人も多く、チャンスがあっても参加しない方に逃げがち。大学側から参加しやすい環境を提供することが必要だと思う。強制的でもいいくらいだと思う。</li> </ul>
その他	4	謝辞、激励

## 5. 考察

調査から、回答者50名のうち、サマプロ参加後、半数を超える人が他のプログラムにも参加し、現在、32名がさまざまな形で海外と関わる業務についていることがわかった。そして、このようなグローバルに活躍する参加者が考えるサマプロ参加の意味は「視野拡大」「姿勢や態度の見直し・不安や恐怖からの脱却」「就職・仕事への繋がり」「他者からの学びによる自己成長」「次のプログラムへの展開」「コミュニケーション力・英語力の向上」の6つに分類することができた。回答は、段階の異なるものが混在しているように思われたため、それらを整理したものが図6である。超短期プログラムの基本にある大きな意義は、視野の拡大であろう。これが原動力となり、さまざまな方向へ展開していく。それまで同じような教育を受け、同じような行動をしてきた集団との交流から、異なる文化背景を持つ学生が交わる空間で新たな価値観やものの考え方を知る衝撃は、若いほど大きいものがあり、また変化も起こりやすい。視野が広がることにより、挫折や己の未熟さを認識する者もいる一方で、体験前の不安や恐怖が払拭される者もいる。そして、時間を共にするメンバーの優れた点や、将来の夢や目標に刺激を受け、自分の中で殻を破るような大きな変容が生ずる。意識の変化により、次の段階ではそれが行動へとつながり、他プログラム参加や留学、進学などにつながっていく。就職活動の時期にさしかかると、以前は考えてもいなかった海外との関わりのある業務もその対象として頭に描くようになり、企業選択の幅も増える。そして、海外赴任も前向きに考えるようになるという流れを示すことができる。また、これは、「プログラム参加の意味」の回答には直接現れてこなかったが、表9などからは現在の環境が英語を使うことには無縁であったとしても、海外や外国語に対する関心や興味は維持、時には向上され、国内にいてもグローバルな視点を持ちながら、海外を意識しながら暮らす姿も浮き彫りとなった。もちろん、全ての人が超短期プログラムに参加することによってこのように前向きに進んでいけるとは言えず、また今回参加者

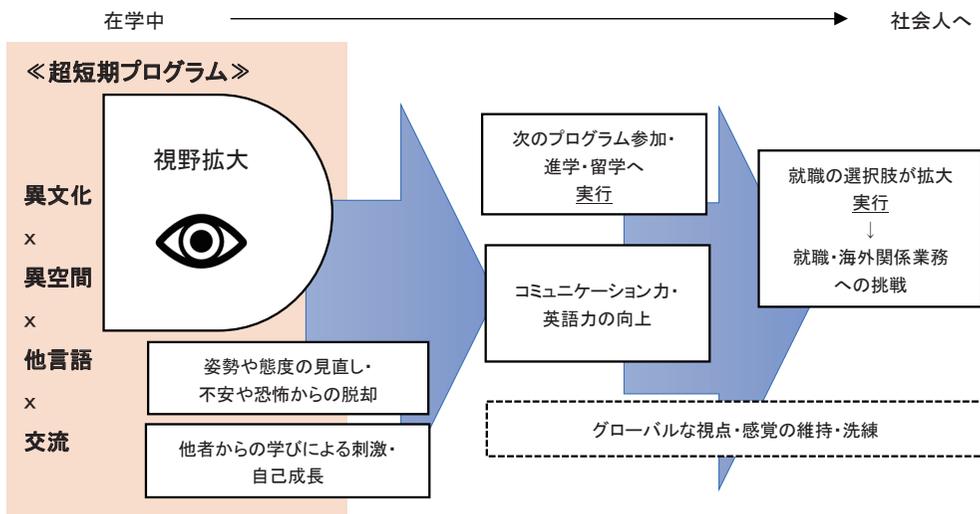


図6 超短期プログラムの意義

全員からの回答を得ているわけではないので断言はできないが、回答者のコメントからはこのような図式を描くことができる。換言すれば、グローバルを意識した本格的な活動を後押しするための最初のきっかけづくりとして、超短期プログラムの価値は非常に大きいと言えよう。それには目的・レベル別の体系的なプログラムの提供が必要である。

異文化適応の5段階<sup>11)</sup>の考え方からすると、超短期プログラムは、異文化の中で何もかもが楽しいいわゆる第一段階の「ハネムーン時期」で終わってしまい、他者の行動、価値観や考え方の違いが目につく「自己崩壊」の時期になる前にプログラムが終了してしまう可能性もある。しかし、これまで本学部で実施したプログラムを見てみると、グループワークなどの協働作業を行うことで、何らかの小さな衝突が起こり、そこから互いが再統合を目指す例も多く見受けられ、時間的制限がある中ではこのような密に関わる協働的な活動を盛り込むことで良い経験を与えることができるのではないだろうか。

では、学生にとって有益な超短期プログラムを提供するにはどうすればよいのであろうか。アンケート調査からは、自主性を重んじること、学生間での密な交流機会を与えることが重要であることが見えてくる。これを実現するためには、施設見学や文化紹介のような見て学ぶ受け身的なものだけではなく、上述したように、Project Based Learningのような個々人が仲間と意見を交わしながら、作り上げていく課題に取り組むのが有効であろう。それにはサマプロでこれまで行ってきた事前準備としての学習に渡航前から海外の学生との関係づくりのための活動を加えるなど、その在り方を見直す必要がある。特にコロナ禍以降、オンラインの急速な普及もあり、種々のツールを駆使した工夫が求められよう。また、自由時間を通しての交流が後々大切な海外の友人を作ることにつながっているケースが多く見られた。活動の日程については、タイトなスケジュールを組むのではなく、参加者が主体的に行動を決めることができる時間を作ることも必要なのである。

今回のアンケート調査は、派遣プログラム参加者からの回答が多く、受入プログラムより大きなインパクトがあり、経験を通しての各自の思いがあったことをうかがわせた。調査結果からは、社会人となった回答者の過半数が海外と関わりのある業務に携わっていることがわかった。在学中は、海外とのつながりやグローバルな社会といったものを意識する機会はそう多くなく、就職後にこのような状況に置かれることを理解している者は少ないであろう。卒業まで、サマプロのみにしか参加しなかった者も半数近く存在することから、これまで本派遣サマプロで行ってきたように、海外で働く先輩の姿を見せ、交流の時間を持つことがその後のキャリアを考える上で有益であると思われる。その際、今回好意的な申し出もあったように、プログラム参加者の中で先輩が後輩にアドバイスを行うといった循環システムが構築できるのが将来的には望ましいと考える。そのためには、プログラム企画者が必要となるときに社会人となったプログラム参加者と連絡が取れるような関係づくりが重要である。SNSが発達した今、つながる操作自体はたやすいことであるが、職務も多忙である中、協力が実現にまで至るのはなかなか容易ではない。しかし、大学側は在校生と卒業生とのパイプ役として可能な範囲で社会人となった卒業生の率直な声を在校生が聞く機会の提供に努める必要がある。

## 6. まとめ

本学部のサマプロ参加者に行った追跡調査をもとに、超短期交流プログラムを実施する意義について検討した。サマプロ参加から3年～11年が経過しての調査であったが、回答者からは現在の立ち位置から当時を振り返って非常に貴重な意見・コメントを得ることができた。結果として、ひと月にも満たない超短期プログラムであっても参加者が得るものは多く、視野拡大により、次に展開していくきっかけ作りとなっていることがわかった。その例としては、他のより長期なプログラムへの参加や、海外と関連のある企業への就職活動があげられる。また、意識や語学スキルの面でも、タフさや行動力、英語力向上など成長しようとする姿勢を導き出していた。現在は実際に海外と関わる業務に従事している者も多く、超短期であってもこの期間の経験が参加者のその後に役立っていることが確認された。さらには、現在、英語を使う業務にない環境であっても継続して海外に興味関心を持ち続けている者が多くいることもわかり、プログラムの長さよりいかに視野拡大の機会を提供するかが重要であると思われた。

以上、超短期プログラムの意義について述べたが、今後のプログラムにおいては、対象レベルの明確化や活動の主体性強化などの検討が必要であることがわかった。これらについては今後の課題としたい。

## 謝辞

アンケート調査にご協力くださった2011年度～2019年度のサマプロ参加者の皆様に深く感謝申し上げます。

## 注

注1 「海外研修実習」は本学工学部独自のプログラムで学生自身が海外研修プログラムを企画し、単独で海外研究施設を訪れ研修を行うプログラムである。

注2 筆者の仁科は2008年度～現在まで、ジスクは2012年度～2019年度まで、イブトナーは2016年度～現在まで同プログラムを担当している。

注3 「学生大使」は山形大学独自の国際交流プログラムであり、海外サテライトオフィスのある協定校で約2週間程度滞在し実地研修を行う。学生交流を通し、グローバル人材に必要な能力を習得することを目的としている。基盤教育科目としての派遣と、通年派遣型がある。「ダブルトライアングルプログラム」は世界展開力強化事業プログラムであり、山形大学とペルー・ボリビア・チリのアンデス諸国3カ国の受入・派遣プログラムで短期派遣の場合、約3週間の実地研修を行った。「JICEによるプログラム」とは一般財団法人日本国際協力センターが実施する事業で、1週間余の日程でのJENESYSプログラムシンガポール派遣、KAKEHASHIプロジェクト米国ハワイ州派遣を指す。

注4 業界・職種の分類については、『就職 四季報総合版2017年版』（2016）、日本学生支援機構『外国人留学生のための就活ガイド2019』（2018）を参考に作成した<sup>9) 10)</sup>。

注5 表中に挙げた回答例は回答者本人が書いたそのままの文章を掲載したが、明らかな誤字・脱字等については筆者が補足修正した。

## 参考文献

1. 独立行政法人日本学生支援機構 (2022) 「2020 (令和2) 年度日本人学生留学状況調査結果」  
[https://www.studyinjapan.go.jp/ja/\\_mt/2022/03/date2020n.pdf](https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2022/03/date2020n.pdf) (2022年9月15日閲覧)
2. 独立行政法人日本学生支援機構 (2021) 「2019 (令和元) 年度日本人学生留学状況調査結果」  
[https://www.studyinjapan.go.jp/ja/\\_mt/2021/03/date2019n.pdf](https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2021/03/date2019n.pdf) (2022年9月15日閲覧)
3. 野水勉・新田功 (2014) 「留学することの意義—平成23・24年度留学生交流支援制度 (短期派遣・ショートビジット) 追加アンケート調査分析結果から—」, ウェブマガジン『留学交流』, 独立行政法人日本学生支援機構  
[https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/\\_icsFiles/afieldfile/2021/02/18/201407nomizunitta.pdf](https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/_icsFiles/afieldfile/2021/02/18/201407nomizunitta.pdf) (2022年9月15日閲覧)
4. 山中司・小田切一弘 (2020) 「大学における超短期留学プログラムの取り組み (立命館大学全学留学プログラムGlobal Fieldwork Projectの分析からみえた教育的意義)」『グローバル人材育成教育研究』, 8 (1): 46-57
5. STUDY ABROAD留学—愛媛大学工学部環境建設工学科 KSAプロジェクト  
<http://www.cee.ehime-u.ac.jp/abroad.html> (2022年9月15日閲覧)
6. 仁科浩美・ジスク,マシュー (2014) 「卒業生が勤務する海外進出日本企業訪問を通じた海外勤務への認識の変容」, 『工学教育』, 62 (3): 62-66
7. 宮本美能 (2012) 「超短期プログラムのポテンシャル—A大学におけるオーストラリア語学研修プログラムの一事例考察—」, 『留学生交流・指導研究』, 15: 77-87
8. 佐々木有紀・新田よしみ・工藤敏郎 (2020) 「短期研修・事前研修の異文化対応力変化の可視化」, 『グローバル人材育成教育研究』, 8 (1): 36-45
9. 東洋経済新報社 (2016) 『就職 四季報総合版2017版』, 東洋経済新報社
10. 独立行政法人日本学生支援機構 (2018) 『外国人留学生のための就活ガイド2019』
11. Adler, P.S. (1975) The Transitional Experience: An Alternative View of Culture Shock, *Journal of Humanistic Psychology*, 15 (4, Fall) : 13-23

## 付録

### 【アンケート調査項目詳細】

1. 参加したプログラムは？ (選択・複数回答可)  
 2011年派遣 / 2012年受入 / 2013年派遣 / 2014年受入 / 2015年派遣 / 2016年受入 / 2017年派遣 / 2019年受入
2. 参加したときの学年は？ (選択)  
 学部2年 / 3年 / 4年 博士前期1年 / 2年 博士後期1年
3. サマープログラムに参加する前に、個人での旅行も含め、海外への渡航経験はありましたか。(選択)

あった／なかった

4. サマープログラムで最も印象深く心に残っていることは何ですか。(記述)
5. サマープログラム参加後、他の海外プログラムや、個人での留学などを経験しましたか。該当するものを選んでください。(選択・複数回答可)  
 学生大使／海外研修実習／協定校への短期交換留学／トビタテ！留学JAPAN／海外インターンシップ／ダブルトライアングルプログラム／JICEによるプログラム／学位取得のための海外留学／語学留学／その他
6. 現在の職業は？(選択)  
 会社員／公務員(教諭・教員を除く)／大学教員／小・中・高の教諭／自営業／学生／その他
7. 6で「会社員」と答えた方に。下記の中で一番近い業界はどれでしょうか。1つお選びください。(選択)  
 マスコミ・メディア／コンサルティング・シンクタンク・リサーチ／情報・通信・関連ソフト／商社・卸売業／金融／メーカー(電気・自動車・機械)／メーカー(素材・食品・生活用品・医薬品・金属・繊維・化学製品等)／建設・不動産／エネルギー／小売り(デパート・コンビニ・スーパー等)／サービス(ゲーム・人材・教育・ホテル・レジャー・交通・物流等)／その他
8. 6で「会社員」と答えた方に。どのような職種でしょうか。近いものをお選びください。複数回答可  
 事務・管理系(総務・会計、物流・在庫管理、貿易事務、一般事務等)／企画系(宣伝広報、マーケティング、企画・商品開発等)／営業系(営業、営業推進・販売促進等)／技術・研究系(研究開発、生産・製造技術、品質・生産管理・施工管理、機械・電子機器設計等)／専門系(MR、介護士、インストラクター、経営・ITコンサルタント、翻訳通訳等)／販売・サービス系(販売スタッフ、店長、バイヤー等)／金融系(ディーラー・トレーダー、証券アナリスト、資産運用マネージャー等)／クリエイティブ系(編集制作、記者・ライター、デザイナー等)／IT系(SE、プログラマー、カスタマーエンジニア、セールスエンジニア等)／その他
9. 仕事(学生の方は学業)で、海外と関わりを持つような業務に携わることがありますか。(例. 海外出張の機会がある、海外駐在した／している、外国人社員と仕事をする機会がある等)(選択)ある／ない
10. 9で「ある」と答えた方に。海外と関わる業務について具体的に教えていただけますか。(記述)
11. 全員にお尋ねします。現在のご自身の英語力はサマープログラム参加時と比較していかがでしょうか。(選択)  
 かなり上がった／上がった／変わらない／下がった／かなり下がった。
12. 11について。変化(または、変化なし)の理由・原因は何だと思えますか。(記述)
13. 現在、サマープログラムに参加した山大メンバーに連絡することはありますか。状況として近いものを2つまで選んでください。(選択)  
 たまに会う人もいる。／だいたい、SNS等を通して連絡する程度／だいたい、連絡を取ることはない／SNS等で近況を見る程度／SNSはつながっているが、ほ

とんど見ていない。／もう連絡を取れる状態にない。

14. 現在、サマープログラムで知り合った海外の学生や現地の人に連絡することはありますか。状況として近いものを2つまで選んでください。

たまに会う人もいる。／だいたい、SNS等を通して連絡する程度／だいたい、連絡を取ることがないが、SNS等で近況を見る程度／SNSはつながっているが、ほとんど見ていない。／もう連絡を取れる状態にない。

15. サマープログラムに参加したことは、その後の学生生活、さらには、あなたのキャリアにどのような意味があったでしょうか。(特にない場合は、「特になし」と書いていただいて結構です。)(記述)
16. 国際プログラムにこれから応募を考える在校生に言っておきたいことがあれば、ぜひお願いいたします。(記述)
17. 国際プログラムを企画する大学側に、ご助言・ご提案等があれば、ぜひお願いいたします。(記述)

## Summary

### Positive Effects of Short-term Exchange Programs on the Future Careers of Japanese Students: A Survey of Yamagata University Faculty of Engineering International Exchange Summer Program Participants

NISHINA Hiromi<sup>1)</sup>, JIPTNER Karolin<sup>1)</sup>, ZISK Matthew<sup>2)</sup>

Short-term exchange programs are common at Japanese universities to promote internationalization and cultural exchange. This study examines the long-term outcome of one such program, the Yamagata University Faculty of Engineering International Exchange Summer Program. We conducted a follow-up survey of participants from the years 2011 to 2019, to examine the significance of joining the program and the influence it has had on their futures. As a result, it was found that even a 10-day program had a great impact on the students' future academic lives and careers. Overall, it was found that the students had an increased interest in joining other exchange programs, including long-term programs, and that several of the students pursued careers in overseas-related work places. Based on the opinions and comments given by the respondents, the impact of the short-term programs was divided into 6 categories, with the most important being a "widening of perspectives". This in turn lead to an increased desire to study abroad or to pursue work in overseas-related companies. Although the program had a duration of only 10 days, it could be shown that it played an important role in shaping students' future choices.

- 1) Faculty of Engineering International Exchange Center, Yamagata University
- 2) Graduate School of International Cultural Studies, Tohoku University